

令和 4年 1月 31日

若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人日本学術振興会 理事長 殿

受付番号 202080354

氏 名 亀山 光明

(氏名は必ず自署すること)

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。
なお、下記記載の内容については相違ありません。

記

- 1 派遣先: 都市名 ホノルル市 (国名 アメリカ合衆国)
- 2 研究課題名 (和文) : 近代仏教と戒律——宗教言説史におけるプラクティスの再検討
- 3 派遣期間: 令和3年 1月 30日 ~ 令和3年3 12月 18日 (323日間)
- 4 受入機関名・部局名: ハワイ大学マノア校・宗教学部
- 5 派遣先で従事した研究内容と研究状況 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

派遣先であるハワイ大学マノア校（アメリカ合衆国、ホノルル市）では、主に明治以降の日本仏教における戒律言説の展開を様々な角度——トランスナショナル・ヒストリー、ジェンダー、修養、科学と宗教の対話など——から考察した。派遣者の受け入れ教員であるミシェル・モール教授は、英語・フランス語圏における東アジア宗教研究の世界的権威であり、派遣者の研究をグローバルな視座に位置付けるべく多くの指導を受けた。

具体的な研究内容としては、(1) 1900年代後半に日本帝国の保護国下に置かれた大韓帝国に渡った日本仏教の持戒僧一団の朝鮮仏教との出会いを考察したほか、(2) 末法思想と対置される「正法」という通仏教的な概念に注目し、これが明治期の日本宗教界の思想動向や東南アジアの仏教との出会いのなかでどのように展開したのかを考察した。(3) さらに、派遣者は戒律実践を支えたカルマ（業）という思想が19世紀後半のグローバルな仏教思想の展開で、科学や国民道徳などの領域との思想交渉をおこなった。(4) また、最後に「修養」という概念に注目し、1900年代における浄土真宗系知識人が「他力」という伝統と修養思想を結び付けたのかを彼らの戒律論にも触れながら考察した。

6 研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

以下に今後の研究成果発表の見通しを示す。(1)については、国際日本文化研究センターが発行する *Japan Review* 誌に来年度を目途に査読付きで公刊予定である。

また、(2)については、その研究内容の一部を2021年8月にヨーロッパ日本研究協会 (EAJS) 主催の Next-Generation Workshop にて報告した。その一部を国際日本文化研究センターの雑誌、『世界の日本研究』に招待付きで寄稿予定であるほか、さらに展開させたものを英語圏の雑誌に投稿予定である。

(3)については、元々、2021年6月に上智大学で開かれる Asian Studies Conference Japan のパネルセッションで発表予定であったが、コロナ禍により中止となった。しかし同学会に出した論文が L. B. Grove Graduate Paper Prize を受賞したほか、その受賞特典として2022年3月末ホノルルで開催予定の Association for Asian Studies (AAS) Annual Conference のパネルセッションにて発表予定である。また同論文を進展させたものを *Journal of Religion in Japan* 誌に投稿中である。

最後に(4)については、研究内容の一部を2021年12月12日の第20回日本仏教総合研究会学会学術大会で招待付きで発表した。また、それを踏まえ改稿したものを同学会が主催する『日本仏教総合研究』に招待付きで投稿予定である。

7 本プログラムに採用されたことで得られたこと (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

総じて今回のアメリカでの研究留学は、派遣者の視野を広げる貴重な機会となった。派遣者にとっては人生はじめての海外滞在となったが、住み慣れた日本を離れ、異文化のなかの生活は語学力の向上はもとより、研究者として国際的な視野を培う契機となったと思われる。とくに、派遣者はこれまで日本宗教研究を主に日本語でおこなってきたが、とくに英語圏の研究の蓄積に触れながら、英語で論文執筆や学会報告をおこなう上で、本プログラムを通じた留学は最適な環境と機会を提供していただいた。

とくに受け入れ教員のミシェル・モール教授には、定期的なミーティングのなかで研究上の多くの示唆をいただき、また英語論文や報告を丁寧に見ていただいた。このようにモール教授の指導は、派遣者がこれから英語圏の日本(宗教)研究と向き合い、対話を交わす上での窓口をひらいてくれるものであった。

さらに、派遣者自身の研究上の進展もさることながら、モール教授との対話のなかで、一国史的な枠組みを超えたグローバルな枠組みで研究を幅広く位置付け、さらにインターディシプリナリーな手法や視座から研究する必要性を痛感させた。これは同時にまた、派遣者自身の研究理論や近接領域の勉強不足を実感させることとなった。このように、派遣者はモール教授の下で多くの気づきを得ることができたのであり、本プログラムを通じた研究留学は実りあるものとなった。

今後はこの経験を糧として英語での研究能力の向上に努めながら、理論や方法面での習熟を目指したい。